（泰澄大師遺跡）

畝畦観音の保存と市文化財指定について

高戸甚右ェ門

あわら市宇根にある補陀洛山畝畦寺（総称して右畦の観音さん）は、旧金津町坪江村内を走る国道８号線、「畝市野々」バス停より約1.5㎞東方の山中にある。当寺は神仏習合の姿をよく残しており、鳥居をくぐり90数段の石段両側には、巨木が繁り所々には、三十三観音像（笏谷石）が安置され観音堂へと続く。

観音堂の前には泰澄大師の立像（笏谷石）が安置され、左方に六社神社が静かな佇まいを見せている。

昭和38年の豪雪で、数戸あった家も転居して今は当山登り口の畝市野々に三戸を残すのみとなり、この三戸が交代で御本尊の観音像をお守りしている。

巨木の下で湿度も高く、畝の現地に在る堂宇は、長年月の風雪にもよく耐えて来たが、今はいつ倒壊してもおかしくない状況であり、一部の縁は脱落している。中に保管されている貴重な仏像は文化財としても価値が高く一刻も早く保護対策を講すべきものと考える。

仏像は泰澄太師の作と伝えられ、前立様（十一面観音）をはじめ、龍神像、文殊菩薩、大日如来、薬師如来、不動明王、毘沙門天像が祀られている。

また最近、各地で文化財や仏像の盗難が続いており、これが保全のためにも、貴重な文化財を護り後世に伝えるためにも、一刻も早い対応が望まれる。

その為には、

1. 一刻も早く市の文化財としての指定をすること。
2. 市当局や市内外の企業・有識者・有志・地元民・区長会の協力を得て奉賛会を設立して広く浄財を募って整備と保存すべきである。

境内にある樹木は巨木（幹廻り３M以上）が多く、社殿の威厳を保ち、その他の植物も多様である。

（１）　樹木

　　栂　幹廻り（４９８ｃｍ）（４００ｃｍ）

　　タブ　（４２５ｃｍ）（３９８ｃｍ）（３本立　２１０ｃｍ、２１８ｃｍ、１７７ｃｍ）

　　杉　（２９５ｃｍ）（２３５ｃｍ）（２４９ｃｍ）（２８８ｃｍ）

　　楓の老木外

（２）　植生

　　イチョウ、ヤブツバキ、ヤツデ、ヒサカキ、ニワトコ、フジ、エゴノキ、ウリノキ、フユツダ、クワクサ、両面シダ、ミズヒキ、ヤマカタバミ、クラマコゲ、イタビカヅラ、チヂミサザ、オオバコ、ドクダミ、フユイチゴ、ミョウガ、アマチヤヅル、スミレサイシン、シシガシラ、ウバユリ、クサアジサイ、イワガラミ、シヤガ、ササユリ、オオイタビ、カニユウモリ、カモメヅル、

マムシグサ、テイカカヅラ、ウワバミソウ、フユノハナワラビ、ゼンマイ、
チクセツニンジン、ヤマアジサイ、アキギリ、ヤブラン、ダンドボロギク、
ナルコユリ、アザミ、ノブキ、キンポウゲ、ミゾソバ、アカソなどが生育して居り
ヒダサンショウウオの生息を地区民は確認している。

１．補陀洛山、畝畦寺

縁起

あわら市宇根にある畝畦寺略縁起によれば、人皇四十二代文武天皇の御代に畝畦の山中（観音川の源流）小池の面上より一老翁現われ頭上に一尺余の十一面観音を戴き、龍宮より来たと云う。老翁尊像を西の方に安置して久しく念持するも誰も気付かなかった。

たまたま泰澄は当山に紫雲たなびき霊気あるを怪しみはるばる訪れ老翁の神人なるを知り、霊像のため一字を建立し尚当山鎮護のため自尊像を彫刻して大社を歓請された。

爾来、霊験崇かで信者は増え隆盛を極めたが、その後発生した一向一揆の乱で寺は破却され、衰退の一途をたどり畝畦千坊の名のみ残った。

ご本尊は秘仏とし、三十三年毎に御開扉することになった（現在は十七年毎）。なお尊像は雨乞の霊験あらたかで五穀豊饒、国土安穏なりと言われている。

（１）泰澄の生涯

越の大徳と尊称された泰澄は、縁起によれば

６８２年、麻生津村三十八社で誕生（現福井市）

６９５年、夢の告があり、越智山に登る

７０２年（大宝二）、越智山に草庵を結ぶ
臥の行春が弟子となる。文武天皇より鎮護國家法師号を賜れる。

７１２年（和銅五）、丸岡豊原寺を創造

７１６年（霊亀二）、白山平泉寺を創造
臥の行者を併って白山に登る。竹田吉谷寺を創建

７１７年（養老元）、上打波　鳩ヶ湯を発見
石川県那谷寺を創建

７１８年（養老二）、粟津温泉を発見。北潟安楽寺を創造。日野山を開く。

７２５年（神亀二）、行基白山に泰澄を尋ね、本地垂迹説について語り合う。
（行基は山中温泉を発見）

７３７年（天平九）、聖武天皇より大和尚号を賜る。

７５８年（天平宝字二）、大谷寺に帰る。
７６７年（神護景雲一）、大谷寺にて遷化される。８６才

（２）泰澄の思想

白山をはじめ各地の山を開き、本地垂迹仏教を説いた泰澄も続日本紀に記載が無いため泰澄の存在は無視されて居たのである。こかし泰澄伝説の山々から、古代須恵器が続々発見された今では、疑う人も少なくなっている。

哲学者梅原猛氏は泰澄という人は、日本文化史において見逃すことのできない重要な人物であると思う・・・・・彼は神仏一体の修験道の思想を白山信仰によって深めた大思想家であると思う。

その思想は行基の八幡信仰に受け継がれ、そして空海の真言密教において完成する。

泰澄の信仰の中心は十一面観音であり、十一面観音は左手に水瓶を持ち、水を司さどる仏なのである。水こそ稲作農業に最も必要なものである・・・・・・・泰澄こそ仏教と稲作農業を結びつけた高僧である。

そればかりか泰澄は木彫りの仏像の創始者であるとの伝承がある。この伝承は十分信憑性があり木彫りの製作も行基、空海に受け継がれ、それ以降ほとんどの日本の仏像が木彫りとなる。

よって、この泰澄の思想を研究すると共に白山信仰を復活させることは、日本における緊急の文化的課題であると思う。

（越智山泰澄の道の巻頭言）より

（３）泰澄の足跡と畝畦寺周辺寺の近況

泰澄の足跡は、福井、石川、岐阜県のほか、２０数府県で見られ、各地で仏教を広め、社寺を建て仏像を作り民衆の教化につとめると共に山を開き、川を治め道を造るなど、民衆のため献身的に活動により「越の大徳」として敬慕された。

しかし、その繁栄も長年月の間に衰退の途をたどることとなる。

その足跡の主なものを挙げると、

① 白山平泉寺・・・勝山市

現在国史跡に指定され、ユネスコの世界遺産にも申請の動きがあり、中世の寺院跡として発掘が進められている。

② 白山豊原寺・・・坂井市丸岡町

縁起によれば、和銅五年（７１２年）泰澄大師によって開かれ、泰澄自ら十一面観音を刻み、豊原八社権限を祀り豊原寺を建立したとある。盛時豊原三千坊とし

て栄えたが、一向一揆の乱禍に会い、その後藩主の庇護を受けたが、明治の廃仏毀釈によって衰退し、更に昭和３８年の豪雪によって集落民離村が相次ぎ荒廃した。その後豊原史跡保存会を発足し熱心な活動で、平成１９年福井県のフットパス事業の指定を受け、跡地も順次整備されている。保存会活動も活発である。

③ 吉谷寺・・・坂井市丸岡町竹田

霊亀２年（７１６年）泰澄の創造とされ、吉谷千坊とか豊原寺同様白山信仰の霊場として繁栄した。滝に打たれ荒修業をするには格好の地形と幽玄な雰囲気である。

豊原寺同様豪雪地で昭和４０年代以降、住民離村したが、現在観音堂と境内の一部は整理され、滝の横にアルミ梯子が固定され磨崖佛拝観の便が計られている。

④ 那谷寺・・・石川県小松市那谷町

白山信仰の寺で養老元年（７１７年）、泰澄によって創建され、泰澄は自ら十一面観音のお姿を彫って、洞窟内に安置して霊場とされた。その後寛和２年（９８６年）花山法皇が行幸の折、洞窟内の観音を拝し霊夢を得て、此処に七堂伽藍を造り自ら居を構えられた。

しかし延元３年（１３３８年）南北朝の争い、文明元年（１４７４年）一向一揆により坊舎は焼かれてしまった。寛永年間（１６４０年）加賀藩主、前田利常公が、本殿、拝殿、唐門、三重塔、護摩堂、鐘楼、書院等を再建し境内の大庭園を複興され、御祈願された。

⑤ 粟津温泉・・・石川県小松市粟津

粟津温泉は養老２年（７１８年）泰澄によって開かれたもので、温泉街には泰澄像が数体（大きいものが３体）祀られて居り、ゆかりの養老山・大王寺は、３１世北原華蓮尼が古刹の法灯を守り、那殿観音（赤瀬観音）奉賛会の活動にも協力して居られる。

⑥ 那殿観音・・・・ 石川県小松市 赤瀬

１３００年前、泰澄が白山巡錫の砌、開発された処で那谷寺の奥の院とも稱され、かつて花山法皇巡幸の途上、当山にて親しく泰澄の遺徳を偲ばれて、霊地の誉高くなったと言われる。梯川の源流に位置する境内は、深山幽谷の雰囲気に満ち、奥の院に泰澄の護身仏が、本堂には観音、勢至、多羅、三観音が祀られ、地元奉賛会の熱心な活動により、毎年５月最終土・日に御開扉法要が厳修されている。

⑦高野山真言宗安楽寺・・・あわら市北潟

養老２年泰澄の創建

越前町天王の八坂神社宮司高橋氏によれば、泰澄がこの地に来た頃八坂神社に祀られている「牛頭天王」が薬師如来に姿を変えて現れ、「この地に寺院を建ててこの里の心身安楽を守護したい・・・」と告げられている。すなわち、北潟の祇園山安楽寺の「本身」は越前町天王の八坂神社の「牛頭天王」であり、その媒介者が泰澄であったことである、と。

保全、保護対策

保護対策については先にも触れたが、無住地区のため盗難や自然災害を想定して、

（１）史跡として境内を指定する。

（２）仏像を鑑定して有形文化財の指定をする。

（３）建造物の補修と老朽化防止を図る。
（本件は可及的速やかな対応が必要である）

（４）自然災害、勤物の害、盗難防止の対策として、サヤ堂の設置。

（５）収蔵庫（貴重物品の保管）の建設が望ましい。

これ等貴重な文化財を護り、後世に伝えるため市の文化財として指定する事が先決である。そして市内外の企業や有識者、有志地区民の協力を得て、奉賛会を設立し、広く浄財を募って整備し、保存すべきである。

平成２４年３月

畝　畦　寺　調　査

名称　　銅造　千手観音立像　1躯

所在　　あわら市宇根　畝畦寺

法量　　像高 42.6cm、髪際高 36.2cm、頂～顎 11.1cm、　髪際～顎 4.7cm
耳張 5.4cm、面幅 4.3cm、面奥 5.9cm、胸厚(右)(現状)6.7cm、
腹厚(現状)6.8cm、肘張(合掌手)12.1cm、裾張 12.1cm、足先開(内側)5cm

形状　　頭上面を戴く千手観音立像、髻を二段に結う。(上段には髪を四束、下段は五束に表す。)頭上面は髻頂に仏面、髻下段に菩薩面 4 面、地髪部に六面を戴く。正面には如来形立像。
天台冠をあらわす。地髪、髪際とも毛筋彫り、□髪一条を上にかき上げ、天冠台の内側からくぐらせ外に垂らし(毛彫を彫まない)、□髪一条は耳半ばを渡る。
耳朶環状、白毫相(現状白毫欠失)、三道を刻む眼は瞳に墨彩、その外側は白土を入れる。
天衣、条帛、裳・腰布を著ける。裳は一段折り返した上に腰布を著け、さらに一段折り返す。手は第一手を合掌手、第二手を宝鉢手とし、千手は前・中・後の三列として、前から七・七・五手の十九手、左右で三十八手、合わせて、四十二手の通形とする。千手は左右とも、前列、上から第五手を除いて、各持物を持つ。(前例第五手は各屈臂して前に出し、錫杖、および戟を執る)。両膝をやや屈して立つ。

構造　　鋳銅製渡金。頭躰は一鋳。髻基部から髻頂面を含んで別鋳差し込み。頭上面各別鋳差し込み。宝鉢手別鋳。千手も各別鋳にして差し込み。背面に別鋳の背蓋をあてる(現状欠失)
地付から 8cm、28cm 高に幅約 2 cm の笄を左右に入れる。天衣垂下部各別鋳。(腰布との接触部で各柄差し)頭飾後補

所見　　髪が高く、面貌も丸く張りがあり、力強い。□髪が天冠台をくぐる表現など鎌倉後期の作にみられるが、天衣の垂下部や裳の折り返しの表現がやや煩雑になりかけているとも思われる。また裳も少し厚みを感じさせるところから、製作は、南北朝期 14 世紀後半ではなかろうか。

調査　　昭和六十三年一月八日　長坂、島田　← 県立博物館学芸員(当時)

＊□の部分は上部が髪、下部左が歩で右が頁の文字

第二十　宇根と畝市野々区の村落誌

一、宇根の観音様

観音様へ参詣する　宇根の観音さまへお参りするには、国道八号線の畝市野々区の入口で下車する。区の入口近くに中西、橋元、伊藤の三軒が道路沿いに列んでいる。これが近年、宇根の元部落から村移りして来た人たちで、宇根には、もう人家はない。この人たちは昔からの観音様と六社神社を、お守りして、今後も維持して行く。ここへ移って来たのは、中西家が昭和三九年、橋元、伊藤両家が同四〇年で、本籍を移したのは、橋元家が昭和四四年六月、中西家が五一年五月、伊藤家が同年六月であった。この三軒は宇根の河内（こうち）に広い山林を所有して昭和五四年に、約一キロメートルの林道上河内線を作り、五七年度にさらに二キロ半の林道を開作して宇根山の奥まで管理している。

畝市野々は、畝畦（うね）寺の山下部落で、中央道路は観音様のお開張のとき、参拝者でにぎわったところ。谷口から観音川沿いに進み、山を登って行くと、元の宇根部落の高台にたどりつく。この高台は宇根河内（こうち）、下宇根河内及び中宇根河内の山々でかこまれたところで、谷川に沿うて道があり、狭い耕地跡が荒れている。観音様がお上（あ）がりになったと伝えられるお池も、泥で埋まって、雑草雑木が生えている。宇根の部落跡に七、八戸の元屋敷が散

在し、小屋が三棟建っていて、その中央を谷川が音を立てて昔ながらに流れている。この村跡の上手に観音堂と六社神社があり、下手に墓地がある。

急な参道を登り鳥居をくぐって、九二段の石段中の両側に並ぶ石仏を拝しながら進むと、うっそうたる巨木の自然林があって、中にはツガとダモの天然記念物（調査中）の樹木もある。その森の中に柱間三間四面（たて横四間）の観音堂がある。これが古来有名な補陀洛山畝畦寺で、左手の小高い所に四尺四方の六社神社がある。お寺の境内は九〇坪（宇根宮ノ下二五号五番地）越前観世音堂三三カ所の七番札所である。ふりかえって多数の石仏をみると、この仏様にも一番から三三番までの番号がついている。他所まで行かなくてもこの宇根の山の上で観音堂めぐりができることになっている。

十一面千手観音菩薩　仏力をもって衆生の苦難を救って下さる仏様である。仏体は鎌倉期以前の作で、扉の中に秘仏として安置し、扉の前に木造の千手観音が立っていらっしゃる。秘仏は閻浮檀金（仏様の国の砂金）で造った金仏であると伝えられるが、前立の観音像は秘仏よりもっと古いという。昭和一八年度に届出た資産台帳は次の通りであった。時価まで書くのは適切でないが、ありのまま写しておく。

（名　称）	（形状法量）	（時価）	（名　称）	（形状法量）	（時価）
十一面千手観音仏	一　青銅製高一尺	二千円	掛　軸	一　丈五尺　幅二尺	三十円
大日如来	一　木造　高八寸	二十円	水　引	一組（赤色人絹）五枚	三十五円
帝釈天	一　木造　高七寸	十円	五具足	一組　眞鋳	五十円

竜神　一　木造　高八寸　十円　仏殿　一　木造　二百円
木造仏　三　木造　高八寸　五十円　安置殿　二　木造　二百円
観音堂　一棟　木造平家　十六坪　八百円　三具足　二個　眞鋳二組　二十円
敷地　九十坪　三十円

宇根の観音に関する史料　次のような史料がある。

一、北国第七番補陀洛山畝畦寺略縁起　宇根村神主伊藤河内守橘祐重、同伊藤和泉寺橘祐正。「明治二十一年十月二十一日写之」とある。

二、宇根観音　宗教結社に関する史料一綴り。金津町前谷松竜寺（浄土宗）所蔵、これは前谷の松竜寺住職山本信孝が書いた昭和一五年のお開張報告と、宗教結社。関係書類。その外に説教用の縁起書が一一通。これは宇根観音の基本資料である。

三、越前国名蹟考の中に簡単に次のことが書いてある。

【宇根村】　高三十九石八斗七升　六所大明神　祭神未考、享保二年八月七日正一位之宣旨、宣命有レ之、神主伊藤河内　右神主当時退転、宣旨等之写。大塩の記文に見ゆ。

【観音堂】　村の上に観世音あり、御手洗二十五間四方ばかり、絵図記

四、石川県時代の神社明細帳　この史料は、明治九年に当時の石川県庁で作ったものを、後福井県庁が訂正した。明治維新のとき政府は「天神地祇」を祭って「廃仏棄釈」を強行し、神社祭祀の国家的体系を確立することになっ

たので、石川県は畝畦寺をそのままにして六社神社だけを登録し、お祭りしてあった仏様に神々の名前をつけ、由緒書も改めた。その後一村落一神社を目標にして、維持できない小社はすべて整理することにしたので、福井県は明治四一年に六社神社を名目上、北潟の天神宮へ移して県の神社明細帳から抹消した。ところが明治の末期にこうしたことが地方の大問題となり、政府も手を焼いて手控えのままになった。

○石川県管下越前国坂井郡宇根村字村上第七号一二番地（福井県と訂正）

村社　六社神社

一、祭　神　天児屋根命（春日社の神）、豊受大命（食物の神）、太力雄命（力の神）、伊佐奈美尊（白山の神）、誉田別尊（応仁天皇）、水象波女命（田畑の水の神）

一、由　緒　人皇四十二代文武天皇御宇大宝二年勧請、明治九年六月十日村社ニ加列、余不詳

一、社　殿　四尺四方

一、境　内　六十四坪（八十坪と訂正あり）民有地第二種

一、境外所有地　山一ケ所但改正前ニ付反別未定、宇根村村上　地価未定。

一、氏子戸数　七戸（八戸と訂正あり）

一、石川県庁迄距離　十六里二十町（福井県庁迄六里三十五町と訂正あり）

以上

明治四十一年三月廿八日　福井県ノ許可ヲ得テ北潟村北潟字天神宮四番地ノ一ヘ移転ス

この記録は六社神社だけのことで、観音堂については全くふれていない。

宇根観音の伝記　村の古老（山崎清重等）たちは、「豊原千坊、宇根千坊」といって、白山信仰の傳承と、観世音菩薩及び六社大明神の伝説を語り伝えている。白山信仰は、白山を御神体とする説で、養老元年（七一七）越の大徳僧泰澄が白山に登拝し、山頂の室堂にこもって修行した。中世には白山神殿仏閣四十余宇が建ち、衆徒四千人と

号し、大修験行場として栄えた。白山信仰は全国に普及して、現在白山神社は二千七百社もある。「宇根千坊」の場所は観音堂から約二〇町（二キロ余）ばかり奥地の笹ケ平で、ここに修験者が集まった。笹ケ平は約五反歩ばかりの高台で今は伊藤市郎右衛門の所有になっている。目標の柿の大木があったが、植林のため伐材して今はない。この平に修験者が使った器物が今でも出土するという。

伝説の観音様は昔一人の老翁が池の中から一尺余りの十一面千手観世音菩薩を捧げて現われ、村の西の山に安置した。ところが山々に紫雲がたなびき、霊光を放った。これを越知山（丹生郡）で修行中の泰澄大師が見て、宇根に来て、老翁と共に畝畦寺を建立し、六所神社を勧請したという。またお開帳の説教本によると、観音様は「西方浄土の脇士」であり、「白山大権現」であって、六社神社の祭神には「竜宮八大竜王」のうちの跋難陀竜王がまつってあるという。これは雨請（あまこい）の神である。

北国第七番

補陀洛山

畝畦寺略縁起

福井県あわら市宇根

補陀洛山　畝畦寺

畝市野々バス停より　一、五〇〇米
高速金津インターより　二、五〇〇米

補陀洛山

北国第七番

補陀洛山 畝畦寺

しづのめがたがやす畝畦の野を遠見
尋ねてはこぶ冥加あらせよ

本尊十一面千手観世音菩薩

補陀洛山畝畦寺に安置し奉るは、大慈大悲の十一面千手観世音菩薩の御尊像にして弘誓深如海歴劫不思議なるが故に一切の菩薩無量なれども誰れか観世自在尊の御利益に及びません。抑も是の御尊像の由来を尋ね奉るに其の昔一切の衆生化益のため

に、この御山に止り給はんとて頃は人皇第四十二代文武天皇の御宇大宝元年六月十八日寅の刻彼の畝畦の山中、小池の面より一老翁現はれ頭上に御高さ一尺有余の十一面千手観世音の尊像を戴き右の手に宝玉を捧げ龍宮より出現あって西の山に其の尊像を安置して自ら持念すること久しけれども人其の所以を知らず。斯くして一四〇〇年天平八年頃泰澄大師は当御山に紫雲たなびき霊気有るをあやしみて遙々訪れ来り給ひしかば、彼老翁語って曰く「我れは是れ龍宮界より来れる者なるが此の霊像は久しく此の霊界を利益し給ふと雖も人界化益の時至るが故に此の地に速やかに来現あるべしとの仏勅に依って御迎ひ奉るなり乞ひ冀はくば大徳我れと志を合せよ」と告げられたり。

泰澄大師は神人なることを知りて感歎惜く能はず相共に此の霊像のために一宇を建立せられたり。

且又当山鎮護の為に自尊像を彫刻あって六社を勧請し給ふ。彼の神翁は当山に留りて護持しければ人呼んで龍兵衛といふ。

夫れ終に禁闕に奏聞ありしかば勅して堂社厳飾の美を尽くし庄園をも寄附せられ此の山号寺号を賜り、これによりて大徳の化益により大慈大悲観音菩薩の尊崇いよ〳〵盛にして道俗男女の参詣日々多くなりしも、加越の乱世の砌に補陀洛山畝畦寺は悉く破却せられしかば依って御本尊は秘仏とならせ給ふ。然れども衆生化益

の観世音なれば三十三年を一回期となし秘仏の開扉を行ふことに奇瑞多しと伝ふ。

然るところ浅倉義景公社領として百二十石並に三寸四方の宝珠を寄附あり、祭礼の節近郷より御参詣ありし時霊感ありと。

然るに太閤検地の時社領没收となり、坊社大破に及びしも龍兵衛の子孫々累代護持したれば東照権現様御代に諸国の宝物を一々参上すべき由御沙汰ありければ当寺の宝玉を献上せし処黄金三十二枚頂いた。

寛永十八年十月二十九日の夜風雨雷電ありて霊感ありたれば御郡代森宗右衛門様また御地頭笹治大膳様へもその旨申上げければ霜月八日に御参詣遊ばされ御威信あり猶又同十五日夜観世音菩薩の霊夢あり、弓矢を宝前に捧げ奉るべし国家安泰なりと。

古来旱の節は郷中より雨乞をなすに霊験あらたかにして三十三年毎に開帳するに五穀豊熟国土安穏なりき。今は十七年毎に行ふ。

霊像出現より千二百七十余年、お開山より千二百八年なり。

安西四年　天保十年　明治六年
明治二十二年　明治三十九　大正十一年
昭和十五年四月十六日～二十五日
昭和三十三年三月三十一日～四月二日
昭和四十七年六月十八日～十九日
平成元年六月十六日～十八日

平成拾七年九月十七日～十八日

前　立　如　来

泰澄大師の直作にましまし霊像は常に拝観を許さざりしを痛く悲しみ給ひ一般衆生の便をはかり給ひての御作なりされば常に拝観を許さる

龍　神　像

泰澄大師の直作にましまして龍王の像なり　抑其由来を尋ぬるに大師　越智山　に御籠居の砌り東北の方より紫雲たなびき光かゞやきければ光をたづね訪ひしに畝畦寺に至る　その光池の中より輝きければ

補陀洛や尋ぬる奥は畝畦寺の
　　み池の波の光たのまん

とのたまへば老翁我龍宮より来る仏勅によって尊像をとゞむ云々と乃ち大師翁の神人なるを知ろしめして　歓喜極りなし爰において末世の衆生に疑を晴させんために龍神の像を彫ませられて安置し奉りしなり

文　珠　菩　薩
大　日　如　来
薬　師　如　来

右三尊は泰澄大師の御直作にまし〳〵或時当山に於て霊夢に感ぜられ苦心御彫刻なり

不動明王

毘沙門天

右二尊も泰澄大師の御直作なり

頌日　　石峰

烱樹欝重畳　入雲巌径通　鳥歌無畏地　龍護大悲宮

花草心清浄　石泉眼玲瓏　誰知観自在　利物古今同

雨請の時霊瑞を仰ぎて

濁なきうねの御池は昔より大悲の波の立たぬ日もなし

うね山の木々の雫のうるほひてこれや誓の雨と降るらん

ありがたやみ池の波のたちまちに千里の外の雨となりゆく

宇根村神主　伊藤河内守　橘　祐重

仝　伊藤和泉守　橘　祐正

右は明示二十一年戊子十月二十一日写之

昭和四十七年六月十八日再版

平成元年六月十五日再版

平成十七年九月十五日再版